

タレント発掘・育成事業における競技選択要因についての研究

久良知 佑丞

キーワード：タレント発掘事業，競技選択，競技転向

Study on the choice factors to athletic event
in Talent Identification and Development project

Yusuke Kurachi

Abstract

It's considered that "program of project" influences the factor from which athletic event is chosen in Talent Identification and Development (TID) project. So this research made it clear whether "program of project" influenced to choose athletic event in Talent Identification and Development project. Five factors of "Friend factor", "Information factor", "Program factor" and "Family factor" "Environment factor" were picked by this research out as "The trigger which begins to athletic event" in Talent of TID project. Three flights, "Athletic event information emphasis group", "Family and environment emphasis group" and "Friend and environment emphasis group" which consist of these factors by a cluster analyses were picked out. The tendency with a lot of "The talent with considering conversion of athletic event" members of a class was seen by "Athletic event information emphasis group" significantly. You suggested the factor which considers athletic event conversion as "The role by the team" and "The significance of athletic event" from "Friend and environment emphasis group". It was possible to get it only by Talent who has begun to undergo influence of the environment with my friend in "Athletic event conversion reason" by this research and compete. It was able to catch that play choice is affected by a program of project than the result of analysis of commencing time of athletic event and the participation number of years of the project in Talent of TID project.

Key words: TID project, choice of athletic event, conversion of athletic event

I. 諸言

I-1. スポーツ基本計画

近年、我が国では高齢化社会化や子どものスポーツ参加の二極化による体力の低下等の健康に対する問題が深刻化している。これらに対して我が国では「スポーツ基本計画」を基として、トップスポーツの競技力向上、障害者スポーツの振興、スポーツによる体力向上・健康増進・スポーツを通じた産業や地域活性化等を目的にスポーツ庁の設置が行われ、子どもの体力向上や学校体育、アンチ・ドーピングに対する施策等が展開されている（2016,スポーツ庁）。

「スポーツ基本計画」は「スポーツ振興法」（1961,文部科学省）を改定した「スポーツ基本法」が基礎となっている。スポーツ基本法25条において優秀なスポーツ選手の確保と育成について、「（省略）優れた資質を有する青少年に対する指導その他の活動への支援、スポーツ選手の競技技術の向上及びその効果の十分な発揮を図る上での必要な環境の整備その他の必要な施策を講ずるものとする。」また「国は、優秀なスポーツ選手及び指導者が、生涯にわたりその有する能力を幅広く社会に生かすことができるよう、社会の各分野で活躍できる知識及び技能の習得に対する支援並びに活躍できる環境の整備とその他の必要な施策を講ずるものとする。」と述べられている。これらをもとに「スポーツ基本計画」では、「今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策」（2011,スポーツ基本法）として、各地域において、次世代アスリートを発掘・育成する体制を整備し、そこで育成されたアスリートが地域の指導者になるといった、スポーツ界における好循環の創出に向けたトップスポーツと地域におけるスポーツとの連携・協働を推進し、トップスポーツが地域に根付くことを画策している（2012,文部科学省）。この次世代アスリート

の発掘・育成を具体的に行う取り組みのひとつにスポーツタレント発掘・育成事業がある。

I-2. スポーツタレント発掘・育成事業

スポーツタレント発掘・育成事業（以下TID事業と略記する）とはスポーツタレントを発掘・育成するという事業であり、個人の体力測定値や指導者の評価といった適性に応じたスポーツを模索する「種目適性型」、特定の種目において、すでにアスリートとしてキャリアを残している選手の適性を見出し選抜する「種目選抜型」、アスリートが自身の特性の生かせる種目に転向する「種目最適型」の3タイプで展開されており、国内においては、地方自治体が日本オリンピック委員会と日本スポーツ振興センターと連携して行なっている事業である。国外のTID先進国においては、英国がサッカー及びラグビーを対象にした「Pitch2Podium」、女性をターゲットにした「Girl4Gold」、長身者を対象とした「Sporting Giants」等の5つのプログラムを実施し、豪国ではASC、AIS、競技団体が連携して6競技を対象にTIDプログラムを推進している。これら以外に、韓国やカタールといった国において、それぞれ競技や種目をターゲットに設定してTID事業が展開されている。

TID事業は「選抜」、「育成」そして「パスウェイ」の3要素で構成されている。「選抜」はTID事業参加希望者に対して、コーチの経験や身体能力テスト、面接等のテストを用いて、タレントの素質を識別するものである。「育成」はタレントがトップアスリートになるための能力を身につけるため、系統的・計画的プログラムを行うことでタレントを育成する。この「育成」において、仙台大学は運動能力の開発に加え、グローバルスポーツ教育プログラム（以下GSEPと

略記する)を提供し、タレントの知的能力の開発・育成を図っている。知的能力開発・育成プログラムはヒューマンスキル、コンセプチュアル・スキル、マネジメント・スキルの3つのコンセプトに基づいた活動から構築されており、これによりタレントはスポーツ科学やコミュニケーション能力、自己管理、情報処理といったプログラムを体験するといった内容になっている。これをもとにGSEPはロードマップ化され(図1)、「楽しむ」段階から「トップを目指す」段階へとタレント自身の育成に必要とされる要素を挙げ、タレントの育成に合ったプログラムの提供を行っている。

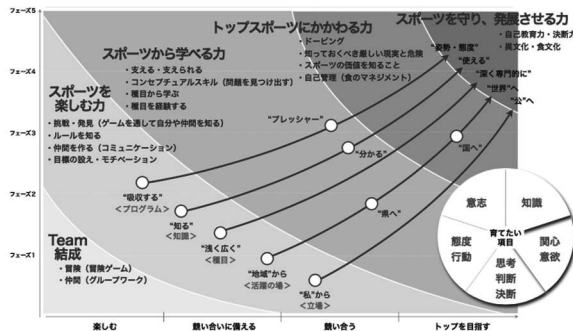


図1 GSEPのロードマップ

これらのような、知的能力開発プログラムに加えて競技体験プログラムや合宿プログラムによって、タレントはトップアスリートに必要な能力の開発と同時に、自身にあった競技種目を体験することができる。そして、「パスウェイ」はタレント自身が、自身の能力に応じて、競技種目を選択する段階であり、TID事業の中心的な要素である。競技選択において、勝田ら(2005)が高校生を対象に行った調査研究では「家族の影響」「誰かからのすすめ」「自分からのすすんで」の動機が同等になったことが報告されている。また、競技選択の時期として「高校入学期」「スポーツ少年団入団期」「中学入学期」を挙げ、この時期に適切なアドバイス支援の必要性を述べており、この年代にお

いて競技選択・競技転向をする要因を明らかにすることがTID事業におけるパスウェイで受講生に対してより適正な支援が行うことができると考えられる。

I-3.福岡県タレント発掘育成事業

福岡県タレント発掘事業は平成16年度から開始され、福岡県立スポーツ科学情報センターと福岡県体育協会が主体となって運営されており、「選抜」で「見つける」、「育成」で「育てる」、「パスウェイ」で「活かす」と3つのコンセプトを挙げて種目適性型の事業を展開している。平成28年度は163名の受講生に対して、能力開発・育成プログラムを提供し、事業の修了生のうち約32%が国際大会の出場や全国大会の優勝といった成果が表れてきている。

福岡県タレント発掘事業では、選抜において、「能力差を正しく見極めること」「可能性を見逃さないこと」「適時性と効果性のバランスを取ること」の3点を重視した、セレクトプログラムを実施している。このプログラムは、小学4・5年生を対象に「形態計測」、「基本的運動能力」、「単純神経系能力」、「コーディネーション能力」、「メンタル・意識・環境」の5項目を「Kidsセレクトプログラム」として、第三次選考までに測定・評価を実施している。また、小学6年・中学1年生を対象として、「Kidsセレクトプログラム」に「持久力」の測定を加えた「Jr.セレクトプログラム」を実施し、発育段階に応じてタレントを選出しており、参加者は平成16年度の第一次選考会に1,522名、平成28年度に46,360名と毎年増加している。この「Kids」と「Jr.」のセレクトプログラムによって、それぞれ選抜されたタレントに対して能力開発・育成プログラムを提供している。

福岡県タレント発掘事業では、育成において、GSEPとは異なった「能力開発・育成

プログラム」を実施しており、「身体能力開発・育成プログラム」、「知的能力開発・育成プログラム」、「保護者サポートプログラム」を展開し、コーディネーショントレーニングやスタビリティートレーニング、視覚トレーニングを実施しており、受講生の発達に合わせた課題を設けることによって、レベルの高い技術を身につけるための基礎を計画的に育成している。また、競技体験プログラムによって、「Kids」は9種目8競技、「Jr.」は12種目4競技と様々な競技を体験することで、より高いレベルで活躍できる機会の場を提供している。この競技体験プログラムの、平成27年度における、競技種目、回数、時間の実施結果を表1に示した。

表1 競技体験プログラム実施結果

	Kids				Jr.		
	種目名	回数	時間		種目名	回数	時間
1	器械体操	4	8	I期	水泳	8	16
2	空手道	4	8		フェンシング		
3	ラグビー	5	10		ウエイトリフティング		
4	競泳	4	8	II期	柔道	7	14
5	ソフトボール	4	8		アーチェリー		
					ボクシング		
6	卓球(5年生)	4	8	III期	ラグビー	7	14
	バドミントン(6年生)				レスリング		
					ホッケー		
7	バスケットボール	3	6	IV期	ハンドボール	6	12
8	スケート	4	8		ライフル射撃		
					サッカー(中学1年)	4	8

「知的能力開発・育成プログラム」は、「Kids」において、「オリンピックの講話」や「食育」、「怪我への対処」、「目標の設定」、「コミュニケーションスキル」等の7種類のプログラムを15回(平成27年度)実施しており、「Jr.」においては、「スポーツ障害」や「情報リテラシー」、「アンチ・ドーピング」等といったより専門的な11種類のプログラムを17回実施している。これらのプログラムは、前年度の編成により、体験競技や知的能力開発・育成プログラムの内容を毎年変更されている。この他に、「遠征・合宿プログ

ラム」の実施によって、実際のトップアスリートの現場を体感することで、受講生の志を高めており、また、受講生に各競技団体TID事業のトライアウトの情報を提供している。

これらのプログラムから自己の課題に対するトレーニングから、技術の習得速度の向上、世界の舞台で物怖じしない人材の育成等を図っている。「保護者サポートプログラム」では保護者が栄養学、医科学の知識を身に付けることで、受講生を日常生活から支援できる体制の構築を図っている。

パスウェイにおいて、福岡県タレント発掘事業では、自己の能力に応じたより高いレベルで活躍できる競技種目へと繋ぐことを目標と掲げており、「能力開発・育成プログラム」によって得られた情報と新しく発現する能力を踏まえて、小学6年次に中学期に実施する競技、中学3年次に高校期に実施する競技と2回の選択の機会がある。このパスウェイプログラムにおいて、受講生は自身の情報を分析、また三者面談を通じて、競技人口や国際競技力、競技環境といった競技種目の情報を提供され、自身がより活躍できる競技種目を選択する。

II. 研究目的

福岡県タレント発掘事業における「育成」から「パスウェイ」の時期において、勝田らは、「高校入学期」「中学入学期」「スポーツ少年団入団期」における競技選択の適切なアドバイスの必要性を述べている。この時期に必要とされる能力をGSEPや福岡県TID事業のように独自のプログラムを用いて、トップアスリートになるために必要とされる能力を開発している。これによって、TID事業の受講生は自身がトップアスリートになるために必要な知的能力である、自己分析能力や情報処理能力等を身に付けることができ、また競技体験プログラムによ

って他競技を体験する場が設けられているため、様々な競技に興味を持つことが可能である。

そのため、事業の受講生において、育成プログラムとパスイブプログラムが競技選択や競技転向の要因となることが考えることができる。また、事業のプログラムを通じて、アスリート・事業の従事者からの影響や競技に対する情報の収集、自身の分析なども競技選択や競技転向の要因となっていることが考えられる。このことから、プログラムの影響を受けた受講生は、事業参加後に競技転向をすることが考えられる。また、事業の参加年数が多くなるほど、この傾向が高くなることが予測される。

そこで本研究は TID 事業において、タレントが競技を選択した要因をもとに受講生を群分けし、タレントが競技選択をする上で、事業のプログラムに影響されているかを明らかにすることである。また、競技転向に対する意識調査を行なうことで、プログラムの影響、および、タレントの競技を開始した経験を元に、競技転向を考える要因を明らかにしようとするものである。これらを競技歴、事業参加年数、競技選択の要因といった受講生の特性をもとに分析することで、事業プログラムの影響を検証する。また、受講生の経験に応じて、事業の従事者はどのようなきっかけを持って受講生が競技に興味関心を抱いたのかを知ることで、受講生が競技選択を行う際、従事者が受講生に対して、支援を行いやすくなると考えた。本研究は競技転向の要因となると考えられる項目を措定することで、受講生の競技選択経験を特性とした、タレントの競技転向をする支援の指標の作成ができ、また、受講生に応じて、どのプログラムが有効に働くのかを明らかにすることができると考えた。

Ⅲ．研究方法

Ⅲ－１．調査時期

平成 28 年 10 月中旬に調査用紙を配布し、各家庭にて調査用紙に記入後、受講生の参加に合わせて平成 28 年 10 月末～11 月上旬に回収を行った。

Ⅲ－２．調査内容

TID 事業受講生に対して「競技を始めたきっかけ」と「競技転向に対する意識」を調べるために質問紙調査を行った。

(a) TID 事業受講生において考慮される「競技を始めたきっかけ」に関する項目を「家族」、「友人」、「学校」、「メディア」、「競技環境」、「TID 事業プログラム」、「自発的な意思」の 7 要因を措定し、各 3 項目で計 21 項目を「よく当てはまる」から「当てはまらない」の 4 件法で質問紙調査を行った。

(b) 「競技転向に対する意識」を調べるため、競技転向を考えたことのある受講生に対して、競技転向を考えた理由を「競技成績」、「競技環境」、「他競技への興味」、「指導者との関係」、「勉強との両立」、「進学での影響」、「チーム内の役割」、「競技継続の意義」、「将来の職業」の 9 要因を各 1 項目で措定し、4 件法で調査した。また、競技転向を考えたことのない受講生に対して、種目転向を考えなかった理由として同様の 9 要因の各 1 項目で「よく当てはまる」から「当てはまらない」の 4 件法で調査した。また、これらの項目以外に競技転向の理由がある場合、自由記述欄に記入していただいた。

また、調査項目の「競技をはじめてきっかけ」と「競技転向に対する意識」に加えて受講生の特性として「学年」、「事業参加歴」、「競技歴」を調査した。

Ⅲ－３．調査対象

小学5年生から中学3年生の福岡県タレント発掘事業の受講生128名（男子57名、女子74名）に対して行った。うち、記入事項の欠如等から有効部数は小学生47名、中学生71名の118部（男子51名、女子69名）として、分析を行った。また、本研究は、展開されているTID事業によって、提供されるプログラムが異なるため、福岡県タレント発掘事業のみを対象とし、他のTID事業では検証の実施は行わなかった。

IV. 結果

IV-1. 因子分析の手順

アンケート項目に設定した「競技を始めたきっかけ」の21項目を用いて、TID事業を受講生が競技を始めたきっかけを因子分析モデルによって検討した。分析にはIBM SPSS Statisticsを用いた。その結果主因子法により5因子が抽出された。さらにそれぞれについて基準バリマックス解を求めた。その結果得られた因子負荷量行列を表2に示した。便宜的に因子負荷量の絶対値が0.45以上を示す因子を今後の考慮の対象とし、表中には絶対値順にソートし、網掛けにして示した。

表2 因子分析結果

項目番号	項目内容	F1	F2	F3	F4	F5
Q.17	私は友人の誘いでその競技を始めた	.887	-.005	.005	-.098	-.012
Q.3	私は、友人がその競技を行っていたので始めた	.808	.066	-.156	-.189	.028
Q.9	私はその競技を友人が行なっていることに興味を持って始めた	.764	.031	.072	-.180	.134
Q.15	私はその競技を競技関係者からの誘いで始めた	.151	.139	.122	-.068	.049
Q.2	私は憧れの選手に影響を受けて現在の競技を始めた	-.035	.691	.127	.142	-.067
Q.4	私がその競技を始めたことに、テレビ番組の影響があった	.238	.674	.082	-.014	-.138
Q.11	私は新聞や本、雑誌などで興味を持って、その競技を始めた	.066	.575	.133	.156	.128
Q.5	私はその競技を、進学先で継続できるので、その競技を始めた	-.131	.568	.199	-.060	.067
Q.6	私はその競技に、タレント発掘事業の競技体験プログラムで興味を持った	.051	.079	.727	-.073	.019
Q.21	私はタレント発掘の指導者の勧めでその競技を始めた	-.014	.082	.710	.004	-.027
Q.19	私はオリンピックに出場するために、その競技を始めた	-.086	.401	.538	.085	-.159
Q.13	私はインターネットで興味を持ち、その競技を始めた	.230	.287	.403	.126	.248
Q.20	私はその競技の方が、前競技より継続しやすいと思ったので、始めた	-.038	.119	.379	-.004	-.095
Q.8	私はその競技が自分自身に合っていると考えて始めた	-.249	.121	.272	-.103	.214
Q.1	私がその競技を始めたきっかけは家族の影響にある	-.011	.072	.045	.949	.170
Q.7	私がその競技を始めたきっかけは兄弟の影響にある	-.145	.120	-.164	.537	.098
Q.16	私は親の勧めでその競技を始めた	.091	.039	.012	.499	.243
Q.14	私は学校の先生に勧められて、その競技を始めた	.050	-.047	.049	.290	.068
Q.18	私は学校の授業がきっかけで、その競技を始めた	.043	.041	.013	.120	.069
Q.12	私は練習場が近いのでその競技を始めた	.036	.007	-.040	-.027	.998
Q.10	私は地元にはスポーツ少年団があったので、その競技を始めた	.109	.073	-.131	.303	.539

IV-2. 因子構造について

第1因子は「友人の誘い」、「友人が行っていたから」、「友人を通じて興味を持った」といった項目で構成されているため、「友人因

子」と解釈できる。第2因子は「テレビ番組」、「憧れの選手の影響」、「新聞や本、雑誌などで興味を持った」、「進学先での継続」といったメディアや進学先に関する項目で構成されているため、「情報因子」と解釈できる。第3因子は「TID事業の指導者の勧め」、「オリンピックに出場するため」、「競技体験プログラムを通じて」といったTID事業のプログラムに関する項目によって特徴づけられる因子であり、「事業プログラム因子」と解釈できる。第4因子は「家族の影響より」、「親にすすめられて」、「兄弟の影響から」という項目で構成されているため、「家族因子」と解釈できる。第5因子は「練習場が近いから」や「地元にはスポーツ少年団があったから」と地域の競技環境に関する項目で構成されているため、「地域環境因子」と解釈できた。

IV-3. 群の抽出

各5因子の合成得点を変量としたウォード法によるクラスター分析を実施し、回答者を分類し3群を得た。各クラスター間で評定平均値を求め、因子間で一元配置の分散分析を行った。その各クラスターの比較の結果を表3と図2に示した。第1クラスター(n=59,小学生20名,中学生39名)では、 $F=4.45$ ($P<.05$) で有意な差が見られ、多重比較 (Tukey 法) の結果、「事業プログラム因子」、「情報因子」、「家族因子」、「地域環境因子」、「友人因子」の順で高い得点を示した。第2クラスター(n=31,小学生15名,中学生16名)では、 $F=17.97$ ($P<.01$) で有意な差が見られ、多重比較の結果、「友人因子」、「地域環境因子」、「事業プログラム因子」、「情報因子」、「家族因子」の順で高い得点を示した。第3クラスター(n=28,小学生12名,中学生16名)では、 $F=64.59$ ($P<.01$) で有意な差が見られ、多重比較の結果、「家族因子」、「地域環境因子」、「情報因子」、「友人因

子」の順で高い得点を示した。この結果から第1クラスターは「競技情報重視群」、第2クラスターは友人因子、次いで地域環境因子が高得点であることから「友人環境重視群」、第3クラスターは家族因子、次いで地域環境因子が高得点であることから「家族環境重視群」と命名した。

表3 各クラスターと因子間における評価平均値

クラスター/因子	F1 友人因子	F2 メディア因子	F3 事業プログラム因子	F4 家族因子	F5 環境因子	分散比
G1 競技情報重視群	1.39	1.79	1.89	1.72	1.59	4.45*
G2 友人環境重視群	3.12	1.81	1.92	1.73	2.65	17.97**
G3 家族環境重視群	1.29	1.58	1.39	3.42	2.77	64.59**

*P<.01, **P<.05

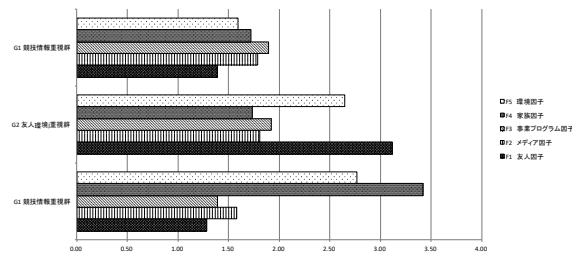


図2 各クラスターと因子間における評価平均値

Ⅳ-4. 群間での各変数の比較

(1) 各群間と競技転向の意識

クラスター分析によって構成された各群間と「競技転向の意識」において競技転向に関して「考えたことのある受講生」と「考えたことのない受講生」の分布を比較した。分析には関連性を見るために χ^2 検定を行ったところ有意であった ($\chi^2=6.794, df=2, P<.05$)。また、その後に残差分析を行った。この結果を表4-1と表4-2に示した。「友人環境重視群」において、競技転向を「考えたことがない」と回答した受講生 (17名, 14.4%) が有意に多いことが示され ($P<.01$)、「考えたことがある」と回答した受講生 (14名, 11.9%) が有意に多いことが示された ($P<.01$)。このことから、友人を要因として競技を開始したタレントは、競技転向を考える傾向が少なくなると推測される。

表4-1 各クラスターと競技転向の意識経験者のクロス表

競技転向の意識/クラスター	G1 競技情報重視群	G2 友人環境重視群	G3 家族環境重視群	合計
考えたことがある	42 (35.6%)	14 (11.9%)	20 (16.9%)	76 (64.4%)
考えたことがない	17 (14.4%)	17 (14.4%)	8 (6.8%)	42 (35.6%)
合計	59 (50.0%)	31 (26.3%)	28 (23.7%)	118 (100%)

表4-2 各クラスターと競技転向の意識経験者の残差

競技転向の意識/クラスター	G1 競技情報重視群	G2 友人環境重視群	G3 家族環境重視群
考えたことがある	1.5	-2.6**	0.9
考えたことがない	-1.5	2.6**	-0.9

**P<.01

(2) 各群間と競技転向の理由

各群間と競技転向の理由の各得点において、一元配置の分散分析を行った (表5, 図3)。競技転向の理由として測定した「競技成績」、「競技環境」、「他競技への興味」、「指導者との関係」、「勉強との両立」、「進学での影響」、「将来の職業」と各群間では有意な差が見られなかったが、「チームでの役割」の項目において、 $F=4.68$ の有意な差 ($P<.05$) が見られ、「競技成績」では $F=6.72$ の有意な差 ($P<.01$) が見られた。また、これらを「競技転向を考えたことのある受講生」(表6, 図4) と「競技転向を考えたことのない受講生」(表7, 図5) に分け、分析を行った。

表5 各クラスターと競技転向要因の評価平均値

クラスター/要因	競技成績	競技環境	他競技への興味	指導者との関係	勉強との両立	進学先	チームでの役割	競技の意義	将来の職業
G1 競技情報重視群	2.20	2.17	2.78	1.85	1.84	1.92	1.76	2.07	2.03
G2 友人環境重視群	2.39	2.39	2.81	2.29	2.13	2.45	2.68	2.77	2.51
G3 家族環境重視群	2.30	2.04	2.82	1.88	1.87	1.99	1.82	1.86	2.12
分散比	0.82	0.70	0.02	2.40	2.79	2.54	6.72**	4.68*	2.08

*P<.01, **P<.05

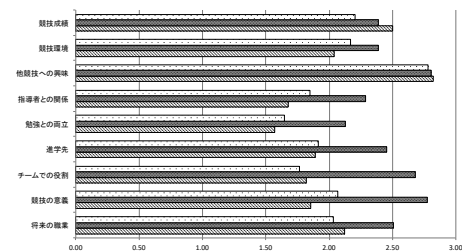


図3 各クラスターと各競技転向要因の評価平均値の比較

表6 競技転向を考えたことのある受講生における各クラスターと競技転向要因の評価平均値

クラスター/要因	競技成績	競技環境	他競技への興味	指導者との関係	勉強との両立	進学先	チームでの役割	競技の意義	将来の職業
G1 競技情報重視群	2.14	1.93	3.00	1.40	1.26	1.71	1.40	1.84	1.92
G2 友人環境重視群	2.00	1.90	3.00	1.40	1.30	2.36	1.79	1.71	2.25
G3 家族環境重視群	2.25	1.50	2.95	1.15	1.10	1.90	1.25	1.40	1.85
分散比	0.24	1.87	0.02	0.83	1.53	2.80	1.85	0.59	0.83

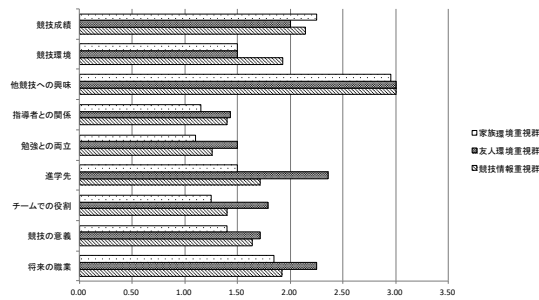


図4 競技転向を考えたことのある受講生における各クラスターと競技転向要因の評定平均値の比較

表7 競技転向を考えたことのない受講生における各クラスターと競技転向要因の評定平均値

クラスター要因	競技成績	競技環境	他競技への興味	指導者との関係	勉強との両立	進学先	チームでの役割	競技の意義	将来の職業
G1 競技情報重視群	2.25	2.76	2.24	2.54	2.59	2.41	2.60	2.12	2.32
G2 友人環境重視群	2.71	3.12	2.65	3.00	2.65	2.54	3.41	3.65	2.72
G3 家族環境重視群	3.13	3.38	2.50	3.00	2.75	2.88	3.25	3.00	2.80
分散比	2.16	1.88	0.77	0.05	0.08	6.40	3.17	1.45	0.66

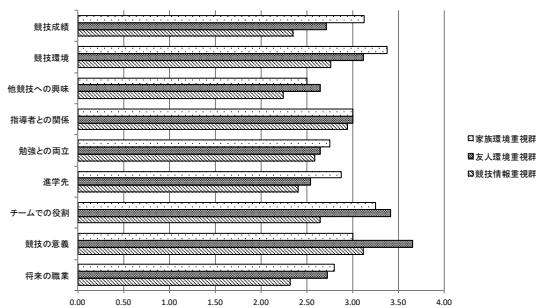


図5 競技転向を考えたことのない受講生における各クラスターと競技転向要因の評定平均値の比較

V. 受講生の特性における群の抽出

V-1. 競技開始時期における群の抽出

前項までのクラスター分析によって得られた群とは別に、受講生の競技歴と TID 事業の参加年数から、事業参加後に競技を開始した「参加後開始群」(n=44)、事業参加以前の競技を主として行っている「参加前開始群」(n=74) の2群を抽出した。これら2群と因子間において、一元配置の分散分析を行い(表8,図6)、この競技参加時期によって導き出された2群と各クラスター間において χ^2 検定を行った。その後に残差分析を用いて、それらの差を検証した(表9-1,9-2)。また、競技転向を「考えたことがある」受講生と「考えたことがない」受講生において、残差分析を用いて、それらの差を検証した(表10-1,10-2,11-1,11-2)。

この結果、「家族因子」において $F=4.45$ の有意な差 ($P<.05$) がみられ、「事業プログラム因子」において $F=11.96$ の有意な差 ($P<.01$) が見られた。また競技開始時期と各クラスター間において、有意な関連性が示された ($P<.05$)。「事業プログラム因子」が最も多く示される「競技情報重視群」において、事業参加後に競技を開始した受講生が有意に多いことが示され ($P<.01$)、また「家族因子」が最も多く示される「家族環境重視群」において、事業参加後に競技を開始した受講生が有意に少ないことが示された ($P<.05$)。また、競技転向を「考えたことのある」受講生において、競技情報重視群で事業参加後に競技を開始した受講生が有意に多いこと ($P<.05$)、家族環境重視群で事業参加後に競技を開始する受講生が少ないこと、競技転向を考えたが、事業参加前競技を継続しているといった受講生が多いことが有意に示された ($P<.05$)。

競技開始時期が事業参加後に多いことから、受講生に対して、競技体験プログラムや競技分析といった、事業のプログラムが競技選択に影響を及ぼしているといえることができる。また、家族を要因として、競技を開始したタレントにおいて、競技転向を考えることはあるが、競技転向を行わない傾向があることが捉えることができる。

表8 競技開始時期における因子間の評定平均値

	人数	F1 友人因子	F2 メディア因子	F3 事業プログラム因子	F4 家族因子	F5 地域環境因子
参加後開始	44	1.71	1.77	2.10	1.89	1.95
参加前開始	74	1.88	1.73	1.59	2.27	2.28
分散比		0.85	0.13	11.96**	4.45*	2.66

** $P<.01$, * $P<.05$

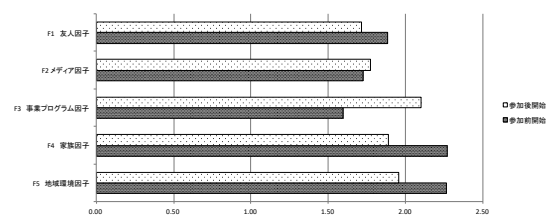


図6 競技開始時期における因子間の評定平均値の比較

表9-1 競技開始時期と各クラスター間のクロス表

クラスター/競技開始時期	参加後開始	参加前開始	合計
G1 競技情報重視群	29 (24.6%)	30 (25.4%)	59
G2 友人環境重視群	10 (8.5%)	21 (17.8%)	31
G3 家族環境重視群	5 (4.2%)	23 (19.5%)	28

表9-2 競技開始時期と各クラスター間の残差

クラスター/競技開始時期	参加後開始	参加前開始
G1 競技情報重視群	2.7**	-2.7**
G2 友人環境重視群	-0.7	0.7
G3 家族環境重視群	-2.4*	2.4*

**P<.01, *P<.05

表10-1 競技転向を考えたことがある受講生における競技開始時期と各クラスター間のクロス表

クラスター/競技開始時期	参加後開始	参加前開始	合計
G1 競技環境重視群	23	19	42
G2 友人環境重視群	6	8	14
G3 家族環境重視群	0	8	8

表10-2 競技転向を考えたことがある受講生における競技開始時期と各クラスター間の残差

クラスター/競技開始時期	参加後開始	参加前開始
G1 競技環境重視群	2.0*	-2.0*
G2 友人環境重視群	-0.2	0.2
G3 家族環境重視群	-2.1*	2.1*

*P<.05

表11-1 競技転向を考えたことがある受講生における競技開始時期と各クラスター間のクロス表

クラスター/競技開始時期	参加後開始	参加前開始	合計
G1 競技環境重視群	6	11	17
G2 友人環境重視群	4	13	17
G3 家族環境重視群	5	15	20

表11-2 競技転向を考えたことがある受講生における競技開始時期と各クラスター間の残差

クラスター/競技開始時期	参加後開始	参加前開始
G1 競技環境重視群	1.4	-1.4
G2 友人環境重視群	0.0	0.0
G3 家族環境重視群	-1.8	1.8

V-2. プログラム参加年数別の因子間分析

TID 事業の参加年数より、受講生を年数別に区別した群(1年目 42名、2年目 28名、3年目 21名、4年目 18名、5年目 9名)と因子間において一元配置の分散分析を行い、その後にプログラム参加年数と各クラスター間の関連性の検証を行った。その結果、事業参加年数において、「事業プログラム因子」に $F=4.60$ の有意な相関 ($P<.01$) が見られた。これらの結果を表 12,13-1,13-2,と

図7に示した。また、また、競技転向を「考えたことがある」受講生と「考えたことがない」受講生において、残差分析を用いて検証した結果を表 14-1,14-2,15-1,15-2 に示した。

この参加年数と因子間の多重比較の結果、プログラムの参加年数が多いほど、事業プログラム因子の得点が高いことが示された。これより、競技体験プログラムや事業の従事者、オリンピックに対する意識といった、事業のプログラムがタレントの競技選択に対して、影響を及ぼしていると捉えることができる。

表12 事業参加年数における各因子の評定平均値

参加年数/因子	人数	F1 友人因子	F2 メディア因子	F3 事業プログラム因子	F4 家族因子	F5 地域環境因子
1年目	42	1.93	1.83	1.54	2.02	2.15
2年目	28	1.86	1.83	1.56	2.38	2.07
3年目	21	1.84	1.86	2.29	1.90	2.21
4年目	18	1.57	1.83	1.91	2.13	2.08
5年目	9	1.63	1.89	2.15	2.33	2.33
分散比		0.51	0.48	4.60**	1.00	0.16

**P<.01

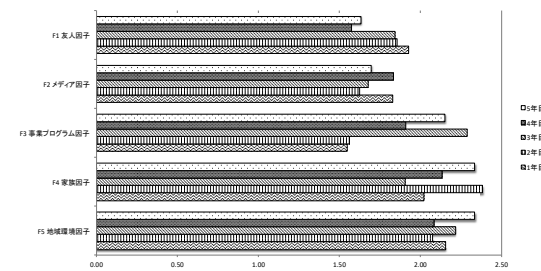


図7 事業参加年数における各因子の評定平均値の比較

表13-1 事業参加年数と各クラスターのクロス表

クラスター/事業参加年数	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	合計
G1 競技情報重視群	23 (19.5%)	10 (8.5%)	12 (10.2%)	9 (7.6%)	5 (4.2%)	59
G2 友人環境重視群	10 (8.5%)	8 (6.8%)	7 (5.9%)	4 (3.4%)	2 (1.7%)	31
G3 家族環境重視群	9 (7.6%)	10 (8.5%)	2 (1.7%)	5 (4.2%)	2 (1.7%)	28
合計	42	28	21	18	9	118

表13-2 事業参加年数と各クラスターの残差

クラスター/事業参加年数	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
G1 競技情報重視群	0.8	-1.7	0.7	0	0.3
G2 友人環境重視群	-0.5	0.3	0.8	-0.4	-0.3
G3 家族環境重視群	-0.4	1.7	-1.7	0.4	-0.1

表14-1 競技転向を考えたことがある受講生における事業参加年数と各クラスターのクロス表

クラスター/事業参加年数	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	合計
G1 競技環境重視群	15	6	9	7	5	42
G2 友人環境重視群	4	4	3	3	0	14
G3 家族環境重視群	7	7	2	3	1	20

表14-2 競技転向を考えたことがある受講生における事業参加年数と各クラスターの残差

クラスター/事業参加年数	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
G1 競技環境重視群	0.3	-1.9	0.8	-0.1	1.4
G2 友人環境重視群	-0.5	0.6	0.3	0.5	-1.2
G3 家族環境重視群	0.1	1.6	-1.1	-0.3	-0.6

表15-1 競技転向を考えたことがない受講生における事業参加年数と各クラスターのクロス表

クラスター/事業参加年数	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	合計
G1 競技環境重視群	8	4	3	2	0	17
G2 友人環境重視群	6	4	4	1	2	17
G3 家族環境重視群	2	3	0	2	1	8

表15-2 競技転向を考えたことがない受講生における事業参加年数と各クラスターの残差

クラスター/事業参加年数	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
G1 競技環境重視群	1.0	-0.3	0.1	0.0	-1.5
G2 友人環境重視群	-0.3	-0.3	1.0	-1.0	1.0
G3 家族環境重視群	-0.8	0.8	-1.4	1.3	0.7

VI. 考察

VI-1. 競技開始のきっかけについて

本結果において、TID 事業の受講生の競技を始めるきっかけとして、友人との関わりを通じて競技を開始する「友人因子」、憧れの選手やテレビ等の媒体の影響で競技を開始する「メディア因子」、競技体験プログラムや TID 事業の指導者等の影響で開始する「事業プログラム因子」、兄弟や親等の家族の影響で競技を開始する「家族因子」、練習場の近さやスポーツ少年団の存在が影響して競技を開始する「地域環境因子」の5因子が抽出された。これら5因子からクラスター分析を用いて、群分けすることで受講生を「競技情報重視群」、「友人環境重視群」、「家族環境重視群」に分類した。これら群より、受講生の過去の経験である「競技を開始したきっかけ」を指標に事業のプログラムが受講生に与える影響を検証した。

VI-2. 各群の特徴から

(1) 競技情報重視群

この群は 50.0% (n=59) と最も人数が検出された群であり、事業プログラム因子が有意に高く、友人因子が有意に低く示されていることが特徴である。また各群の中で家族因子と地域環境因子の値が最も低く表

れている。各クラスターと競技転向の意識経験のクロス分析の結果より、競技情報重要視群において、競技転向を考えたことがある受講生が 42 名 (35.6%) と考えたことがない受講生が 17 名 (14.4%) と競技転向を考えたことがある受講生が多い傾向が示された。このことより、TID 事業の体験プログラム、指導者やテレビや本といったメディアの影響をきっかけとして競技を開始した受講生において競技転向を考える経験を持つ傾向があることが解釈された。

(2) 友人環境重視群

この群 (n=31) は友人因子、次いで地域環境因子の評定平均値が高く表れた群である。各クラスターと競技転向の意識経験のクロス分析の結果より、友人環境重要視群において、競技転向を考えていない受講生が多いことが有意に示された ($P<.01$)。このことより、友人の影響、スポーツ少年団や練習場の近さといった地域の環境の影響をきっかけとして競技を開始した受講生においては、競技転向を考えにくい傾向が解釈された。また、競技転向要因において、「チームでの役割」と「競技の意義」で有意な差が表れたことから、友人や環境の影響で競技を開始した受講生は、競技転向を行う際、または競技転向を考えるきっかけとして、試合の出場機会やキャプテン、主将といったチームでの自身の役割や競技を行う意義を考慮する傾向が示唆された。

(3) 家族環境重視群

この群 (n=28) は家族因子の評定平均値が最も高く表れ、次いで地域環境因子と有意に高く表れた。競技転向の意識経験を 71.4% の受講生が「考えたことがある」と回答している。この点において、競技情報重視群と同じく多く表れたが、全体数が少ないため、家族や環境の影響で競技を開始した

受講生が競技転向に対して、積極的に取り組む傾向が表れたとはいえない。また、この群のもう一つの特徴として、事業の参加以前から開始している競技を継続して行っていることが有意に示された ($P<.05$)。このことから、家族や環境をきっかけとした受講生は事業の参加以前から開始している競技を継続して行う傾向が示唆された。しかし、競技転向を考えたことがあると回答した割合が多かったことも無視はできないため、今後の検証においてはこれを考慮しなければならない。

VI-3. TID事業プログラムの影響について

最も事業プログラム因子が多く示された、競技情報重視群において、TID 事業参加後に競技を開始した受講生が有意に多く表れたこと、また TID 事業の参加年数と事業プログラム因子の間に有意な相関が表れたことから、競技体験プログラムや TID 事業の指導者の影響等が受講生の競技を始めるきっかけに、関連することが示唆された。また、このことより、本研究の目的に示した、受講生の競技選択、競技転向において、TID 事業のプログラムが影響を与えているという仮説が明らかになった。

VII. まとめ及び今後の課題

本研究により、TID 事業受講生においての「競技を開始するきっかけ」として「友人因子」、「情報因子」、「事業プログラム因子」、「家族因子」、「地域環境因子」の 5 因子が抽出された。また、それら因子のクラスター分析より、競技情報重視群に「競技転向を考えたことがある」受講生が多い傾向が有意に見られた。友人環境重視群から、競技転向を考える要因を「チームでの役割」と「競技の意義」として示唆された。しかし、アンケートの「競技転向を考えた理由」および「考えていない理由」の自由記述より「オリンピック

を目指すため」、「選考で受かったから」、「自身の適性のある競技を見つけたい」、「怪我のため」といった設定されていなかった 4 項目についての回答が 6 件あった。

本研究とこれらのことから、競技転向の要因となる「TID 事業の認知」や「怪我の影響」、「アスリートの影響」といった項目の測定はさらに幅広く行わなければならないことが、今後の課題であり、競技転向を考える理由においても、「競技体験プログラムかオーディションの影響か」といった事業のプログラムの影響を、より具体的に明記された項目の作成が必要であると考えられる。また、この研究を進めるにあたって、子どもの心身の成長とプライバシーの観点をよく吟味しなければならない。

本研究では「競技転向の理由」において、友人と環境の影響を受けて競技を開始した受講生でしか得ることができなかった。TID 事業の受講生において競技の開始時期と事業の参加年数の分析結果より、競技選択には事業のプログラムの影響があることが捉えることができた。しかし、小学生や中学生においては心身の成長がまだ途上であること、また各事業によってプログラムが異なるため、一度に大量のサンプルを回収することが難しいこと、これらを考慮すると経年的な観察を用いた検証が、今後の競技転向の要因を明らかにすることが必要である。

VIII. 参考文献

文部科学省 (2012 年), スポーツ基本法
文部科学省 (2012 年), スポーツ基本計画
徳江 郁美, 栗木 一博, アスリートにおけるスポーツに関わる「知的能力」の構造について～スポーツタレント発掘・育成事業におけるグローバルスポーツプログラムに着目して～: 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, Vol.15, 2014 年

3月

公益財団法人 福岡県スポーツ振興センター：福岡県タレント発掘事業 事業説明資料（平成 29 年度版）

公益財団法人 福岡県体育協会：体協ふくおか, vol.103, p.16, 2016 年 1 月 29 日発行

勝田 隆, 栗木 一博, 小西 裕之, 和久貴洋, 蒲生 清明, タレント発掘プログラムの必要性と可能性 種目転向プログラムの構築に関する基礎調査：仙台大学紀, Vol.36, No.2, p.p.50-58, 2005 年

松田 泰定, 東川 安雄, 荒井 貞光, スポーツ行動に関する実証的研究(3)―スポーツ種目選択行動について―：体育学研究, 第 24 巻, 第 1 号, 1987 年